

花と緑(食)よる地域づくり視察と交流

～みんながヤーニンジュ(家族)のふるさとづくり～

1. 日時:平成22年10月27日(水) 午前10時～12時20分
2. 視察場所及び順路 ()は説明者

午前10:00 広栄アパート駐車場到着

歓迎のあいさつ

(二区自治会長 棚原春男)

※「いがシマ大好き名人」が案内します !

総合案内

(一区自治会長 又吉実)



(わくわく代表 宮里裕子)

10:10

わくわくの花壇

(棚原カツ子・棚原靖子)



10:15

わくわく農園

(新垣有仁・新垣重雄)



10:30

分校跡

(棚原正吉)



10:35

ウマイー通り入口

(玉城博文)



10:55

かりゆしパーク

(宮里静江 他)



11:10

東り毛 (アガリモウ)

(比嘉常正)



11:20

桜並木

(棚原正二)



11:30

西原公民館に到着

昼食及び交流会

司会 宮里啓子

12:20

西原公民館出発

◎ 訪ねて来てくれたあなた達もヤーニンジュ(家族) !

◎ 又来てね!! 待ってま〜す♪



花と緑(食)による地域づくり視察と交流～みんながヤーミンジュ(家族)のふるさとづくり～

平成 22 年 10 月 27 日(水)浦添市西原において、(仮)浦添コミュニティ・ランドスケープ研究会主催で琉球大学の学生さんと地域の方々との交流会及び、視察が行われました。



わくわくの花壇



わくわく農園



分校跡



ウマイー通り入口



かりゆしパーク



東リ毛 (アガリモウ)



昼食及び交流会



花と緑(食)による地域づくり視察と交流 ～みんながヤーニンジュ(家族)のふるさとづくりを終えて

平成22年11月9日

琉球大学の学生のみなさんへ

先日は、琉球大学の学生のみなさんが私達のふるさと西原を訪問してくださって、ありがとうございました。視察や交流会はいかがでしたか、それを通してみなさんが何か得たとしたら幸いです。

当日、あいにくの雨の中でも、みなさんが熱心に学ぶ姿を見て感心しました。そして短い時間でしたが、みなさんと一緒に歩いて活動の現場を見て、手づくりの料理を食べたことは、私達にとってもよい思い出になりました。

今回みなさんから、たくさんの感想や貴重な質問をいただきましたことも感謝いたします。みなさんの質問に答えるために何回か話し合いをしたことで、自分達の活動の楽しさや喜び、メンバーの地域に対する思いまで確認しあえたのも、私達にとって大きな収穫でした。これを糧にさらに活動を楽しみながら、「みんながヤーニンジュ(家族)のふるさとづくり」をこれからも続けていきます。訪ねてくれたみなさんもヤーニンジュ(家族)です。また訪ねてくれるのを楽しみにしています。

最後にみなさんにはお願いですが、若者を地域の活動に参加させるための方法や、今回の視察で気づいたことなどみなさんの声を私達に聞かせてください。そして、一緒に私達のふるさとづくりに参加してくださることを期待して待っています。

西原のヤーニンジュ(家族)一同より

以下 皆さんからの質問に対してお答えします。不十分な点もあるかと思いますが、さらに聞きたい方はぜひまた訪ねてきてください。

質問1. 遊び場以外にどのようなまちづくりをしているか。

- ・ 西原まつり（約320年の伝統を誇る大綱引き・旗頭・エイサー・盆踊り）
- ・ 西原ふれあい市（黒糖作り・舞台発表・地産地消の食堂・宝物展・野菜市・フリーマーケット・昔遊び等）
- ・ 浦添市主催でだこウォーク参加者2千人を、地域の食でおもてなし
- ・ 環境美化活動（ゴミ捨て場を花壇に・道路の植栽帯の手入れ・桜を記念樹として植え、桜並木をつくりその手入れ・道路のごみ拾いなど）
- ・ あいさつ運動
- ・ わくわく農園でさとうきびや野菜を育て、地域の食としてまつりなどのイベントに無料で提供している。
- ・ ふれあいサロン
- ・ その他、いろいろ気づいた時に気づいた事をやっている。

質問2. 活動はどのくらいの頻度で行っているの

- ・ まつりなどの大きなイベントは月1回程度で、年間を通して開催（イベントの前にはかなりの練習や準備のための時間をかけている）
- ・ 踊りのサークルやエイサーなどの各種活動は月1, 2回或いは週1回のところがある
- ・ 老人会などは月4, 5回
- ・ 美化活動は、毎日、或いは週1回、月1回と場所によって定期的に行っている所と、状況を見ながらやっている所もある。（農園は毎週1, 2回）

質問3. 小中学校でも活動が行われているか。どのような活動か。

- ・ 県主催のクリーン・グリーン・グレイシャス（CGC 運動）として自治会で行われているごみ拾いに、小中学生が参加している。ごみ拾いの後は、子ども達がおやつのヒラヤーチーを作り、大人の参加者と一緒に食べて交流した。
- ・ エイサー保存会や旗頭のメンバーが、中学校の運動会や文化祭で演技を披露

質問4. 実行するために必要な資金はどのようにして得るのか。また助成金とは何？

（１）浦添市からの地域への助成制度

・ まちづくりプラン賞：市の良好な景観を残し、寄与する活動を支援・表彰・助成する制度。助成金を獲得するために、各種団体、個人が応募し、公開審査を受ける。

（２）まちづくりフェスタ事業

市の緑の保全・創出を目的に、緑化により地域に潤いを与える環境づくりのために自治会を中心に緑化計画をたて応募する。その後の審査のうえ、整備計画を地域の住民と共につくり、整備を市が、維持管理は地域住民が行う。

（３）助成金などを活用して行った事業

- ①東り毛（公園）の遊び場づくり：市のプラン賞に応募して助成金を獲得・市のフェスタ事業に応募して、市の予算で公園を整備
- ②ゴミ捨て場を花壇に（かりゆしパーク・ウマイー入口・イチニングムイ等）市のフェスタ事業等で公園整備
- ③ゴミ捨て場を花壇に（わくわくの花壇）南部国道事務所の予算による整備
- ④ゴミ捨て場を花壇に（旭グループの花壇）浦添市と南部国道事務所の支援
- ⑤各種サークルや団体に対しては、自治会から補助金を出す
- ⑥個人負担（視察研修などの際は受益者負担・花壇への苗の提供や水遣りのための水・ペットボトル等のリサイクル風車の提供など）
- ⑦市のサポーター制度（市道等の管理に対して、市から花の苗や肥料等の提供）
- ⑧県から道路沿いに置く、イスやテーブルの提供

質問5. 地域づくりはどこまで繁栄されれば、達成といえるのか。

誰もが心から楽しんで、あたりまえのことをあたりまえのようにやり続けていて、みんなが幸せを実感し、そこに笑顔があふれるような地域になれば達成といえるかもしれない。（しかし、今はまだ道半ばという所・・・）

質問6. どうやって人を集めたか

- ・ わくわくのサークル：自治公民館講座の後、受講者でサークルを結成、その後に開催された剪定講座からも、結いサークルが結成され活動している。
- ・ 一に声掛け、二に声掛け
- ・ 自治会便りや自治会の放送で
- ・ イベントの前にも常に声を掛け、参加したことで楽しさを感じてもらうことで、次につながる。
- ・ その人が関心のあること、得意なことを頼むと参加しやすい

質問7. 公共のエリアに関する交渉はどのような段階、期間をもって行うものなのか。

- ①まず、地域の人たちでワークショップをして意見をまとめる
- ②行政に出かけ、直接その担当者と会って、ワークショップでまとめた地域からの声を伝える
- ③できるだけ時間・期間をかけ、情報を共有する
- ④③の積み重ねで信頼関係を築く
- ⑤行政・業者と地域住民のワークショップ
- ⑥整備工事着工その間もこまめに調整のための話をする
- ⑦完成
- ⑧その後の様子（良かったこと等）を行政の担当者に伝える。或いは直接その場に来てもらい喜びを分かち合う、その繰り返しを丁寧に行っていくこと

質問8. できることをできるひとができるときに、の愛言葉はいつ頃できたの

わくわくサークル結成の2年目ぐらいに、活動に参加できない人を批判したりせず、いろんなことを受容しながら楽しく活動したいということでした。

質問9. 団体の構成メンバーの年齢層は

- ・わくわくサークルは40代～70代の男女、しかし最近はメンバー以外にも子どもやその父母も参加するようになった。
- ・その他、各種団体が多様な年齢で活動している

質問10. 最初、苦勞したことはありますか

あります

- ・なかなか人が集まらなかったこと
- ・ボランティアはこうであるべき（必ず参加すべき等）といった考え方が強く、活動を楽しむことができなかった。
- ・そのことが愛言葉「でいることを できるひとが できるときに」につながり、徐々に理解され現在はそれがみんなに根付いている。

※それをどのようにして乗り越えたの？

- ・たくさんの感動があったこと。
- ・仲間と話して、泣いて、笑って支えあって乗り越えた。
- ・よいこと探しの名人をめざす



質問11. 若者はまちづくりに参加しているのか。参加しているとしたら具体的にどのようなことをしているのか

一部だが幼児から40代が参加している。エイサー保存会・母親クラブ・旗頭・自治会役員・市自治会対抗陸上競技大会、ふれあい市・てだこウォークのおもてなし等

質問12. 景観デザインで工夫したことは

- ・地域性をいかす
- ・なるべく原風景は変えない
- ・自然素材を使用する
- ・沖縄の素材を使用する
- ・イスやテーブルを配置し、そこを利用して交流することができるやさしいまちづくり

質問13. 台風・災害時の対策は？

- ・ 台風対策は各自で行い、特別な防災訓練等は実施していない。
- ・ 市の消防が自治会に3名の消防団員を任命している。
- ・ 視察研修の時の地域の食でのおもてなしや、イベントの際に作る大量の食事づくりが防災の炊き出し訓練になっていると思う。

質問14. 児童センターや公民館利用者について、若者はあまり利用しないのでは。

- ①児童センターは、週1回の夜間開放日に、少人数の中高校生が利用している。
- ②公民館は毎月第3日曜日に、公民館開放日を設けているが、若者の利用は少ない。
- ③エイサーや旗頭の練習の場として、若者が定期的に公民館を利用している。
- ④公民館の中は利用しないが、公民館のベランダにテーブルとイスを置いてあるので、そこは宿題をしたりユンタクをするために集まった小学生から中高年生、青年達の姿があり年中絶えずよく利用されている。

質問15. ①クサティムイとは：集落を抱きかかえるように守っているまわりの森（小高い丘）のことを腰当森（クサティムイ）といい、そこには御嶽が祭られている。

②ウガン山とは：西原の東側にある、地域を守るクサティムイのこと

③フートヤーとは：（別名 お宮）西原の地域内にある拝所。普天間神宮につながる学問の神様が祀られていると言われている。フーを取る（良い事を取り入れるの意味）やフートゥヤー（良い方向に案内する水先案内人の意味）等と言われている。

質問16. 地産地消について、堆肥や収穫したものを食べる以外のどんなことをしているの

- ・ 子ども達の農体験
- ・ 育てた野菜を、自治会のイベントの時に、食材として無料で提供
- ・ ふれあい市での新鮮野菜の販売
- ・ 視察に来た人達に地域の食でおもてなしをして、地産地消の大切さやすばらしさを伝える。

質問17. どのようにしたら地域の団結力がうまれるの

今から約50年前までは、年代ごとの自治会役員のシステムがあり、それがきちんと機能していた。あたりまえのこととして役員をすることでいろんなことを先輩から教わりながら、縦横の人間関係のつながりができていった。

自分が役員の時に、〇〇さんに助けられたから、〇〇さんが役員の時には自分が協力するという話をよく聞いた。

質問18. 引っ越して来た方にどのようにして地域になじむようにしているのか。

現在はほとんどしていないので、今後は引っ越して来た方を、自治会長が直接訪問して地域との関わりが持てるようにしたい。それが自治会加入にもつながると思う。

質問19. 今後はどんな計画をあるのか

- ・ 第3日曜日の公民館開放日を周知させて、誰もが気軽に公民館を利用して居場所になるようにしたい（やりたいことができて、やりたくなければ何もしなくても良いという自由で安心できる居場所・地域のお茶の間）
- ・ 浦西中学校区（8自治会）を花と緑でつなぐ「オープンガーデン」

質問20. 中間層(10代~40代)を対象とした活動、地域活動に積極的に活動にしている人が少なく、年齢層が両極化しているのではないか。

そのとおりです。中間層の人達は学校や仕事・家庭や子育てと、多忙な世代です。また経済的なこともあり、地域活動などのボランティアをするには厳しい状況だと思います。

現に地域活動には参加しなくても、子どものためのPTAの活動に参加する人は多い。しかし、いま地域で活動している人たちが楽しんで活動している後姿を見せていけば、いずれ時がくれば参加するようになると思う。

私も若い頃は親が地域の婦人会活動をしている姿を見ても、あまり関心がなかったが、今は地域活動にはまっているのだから、人はどう変わるかわからないので、今現在だけを見ないで気長に見守り、できそうな時はとりあえず声をかける。

子どもが地域活動に参加するようになって、その親が参加するようになることもある。

質問21. 荒地やゴミ捨て場を花壇に変えようと思ったきっかけは何か

自分達の住む地域をきれいにしたかったから。場を整えることは心を整えることであり、子ども達に地域への誇りを持たせたかったこと。ゴミの中で子育てをしてはいけない。

質問22. 景観が代わっていく過程で何か感じることはあるか

- ・仲間同士の絆が深まり、1人では出来ないことでもみんなでやれば出来ることがたくさんあると実感する。
- ・地域に愛着、誇りがもて、「西原が好き！」と言えるようになった。
- ・活動に関わってない地域の人や、西原を訪ねてくれる人たちが「きれいにしているね!」「清々しくて気持ちがいい!」と喜んでくれ、声をかけるようになった。

質問23. ジブリアニメのような発想は誰によって発案されたのか

ジブリアニメのように見えるかもしれませんが、はるまーいや等はもともと地域の畑にはあったもので、それをやっただけのことです。

質問24. 役所が市民にとって遠い存在、働きかけづらい

最初はどこも遠い存在です。だから原さんが自ら役所を訪ね近づいていくことです。そうして何度も訪ね話をして信頼関係を築いていくことが、まちづくりのスタートであり、まちづくりの醍醐味でもあります。

質問25. なぜ行政主導の形ではなく、市民が主体となった活動を展開できたのか

自分達の地域は自分達で良い地域にしていくのが本来の姿だと思う。
地域は地域住民が主役、地域のことは地域住民が話し合って決めることが基本であり、行政はそれを支援するのが役割であると考えているから。

質問26. 仕事ではない活動を続け、結果を出すのは難しいことが多いのでは

特別難しいことはない。楽しいから続けることができるし、そこからどんどんこんなことをしたいという良いアイデアも出てきている。活動している人達は、ボランティアをしているという特別意識はほとんどない。

しかし、地域でも活動に参加している人はまだごく一部の人なので、より多くの人が活動に参加して、人のつながりや生きがいを見出してほしいと願っている。「地域活動の楽しさはみんなの宝、だからあなたとも分かち合いたい!」

質問27. 活動は地域の人をためなのか？外部の人を呼ぶために行っているの

まず自分のため（楽しいから）、それから自分の地域のため（役立って嬉しいから）やっている。

質問28. わくわく農園などが外部の人にとってどれほどの価値を見出せるのか

自分達が楽しいから、外部の人がどう評価するかはあまり気にしていない。

しかし、わくわく農園を視察に来て活動について説明を聞いた人達が、感動してくれるのでそれはとても嬉しい。ただ景観として農園を見るのと、そこでいきいきと活動している人達の生の声を聞くのでは、農園の捉え方はおのずと違ってくるのだと思う

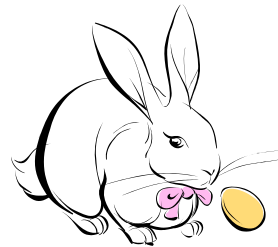
質問29. 桜並木について、歴史的な文化遺産が残る地区で、桜以外の選択肢はなかったのか。もともとある植物を植えるのはどうか。

植えた桜は沖縄在来寒緋桜です。地域でもわざわざ北部まで桜を楽しみに行く人も多く、桜は最も多くの人に愛される木だと思うので桜にした。

不法投棄のゴミ捨て場だった場所に、桜を植え並木を作り、各自が維持管理をすることで愛着がわき、桜で地域と人がつながり、行政ともつながり、そこに明るい夢や希望が湧いてきたことは意義があると思う。将来は桜祭りをして楽しみたい。

質問30. 遊び場づくりの成果は

- ・ 以前は子ども達だけ行かせるには不安だったが、今は子どもだけでも安心してのびのびと遊べるような場所になった。
- ・ 公園の中で遊ぶ子ども達の姿を、通りすがりの車からも見られるので、ほほえましい気持ちになる。
- ・ 仕事帰りのお父さんや青年たちも仲間同士で集まり、飲みながら楽しそうにユンタクしている
- ・ 子どもを狙った犯罪がなくなった。
- ・ 遊び場の遊具の修理を自主的にやる人が出てきた。
- ・ 高齢者の方がのんびり休んでいる
- ・ 花と緑が増えた。
- ・



質問31. イベントに対する参加者の反応は

西原ふれあい市の反応は

- ・ 多くの地域の人たちが参加し、交流して喜ばれている。「あら久しぶり！元気だったね」の声がふれあい市の風物詩のひとつ。
- ・ 黒糖づくりの体験し、作りたての黒糖を食べておいしいと感動している人が多い。（西原がさとうきびづくりで生活を支えてきたことを、子ども達へ伝えていく機会にもなっている）
- ・ 宝物展をしたことによって、宝物の価値観が違ってきた。みんなちがってみんないい。
- ・ まつりの規模や内容、その実行力が高く評価されている。
- ・ まつりの実行委員が増えた（第1回20名 現在は120名）

質問32. 活動は高齢者が多いのでは。もし今活動している高齢の人たちが亡くなられたら、地域づくりはどのように変化するのだろうか

地域活動の変化を恐れてはならないと思う。時代は変わるし、今は若者でもいずれは高齢者になるのだから、その時代にあったこと、やりたいことをその都度話し合ってやればいいと思う。私達は今を楽しみ、その後姿を見せていくだけ。これから地域に話し合いの風土をつくり、それを残せるようにしたいと思う。

質問33. どのような気持ちで、地域づくりに参加しているのか

- ・ 地域が好きだから・自分にできることだから・健康になるから
- ・ 仲間ができるから・勉強になるから・あたりまえだから
- ・ 交流できるから・ユンタクが一番、仕事は2番
- ・ ほかにもいいことがたくさんあるから



質問34. 西原の地元愛はどこからくるのか. 現在地域のために一生懸命活動している大人の人は、子どもの頃にどのような教育を受けたのか

小さい頃から親に、地域の役目がまわってきたら「地域のために、人並みのことはしなさい」と言われて育った。ふりかえると、半ば強制的のさせられたような役員をしたこともあるが、そこで仲間もできて、地域のことも良く分かるようになった。

当時は断るという選択肢などなく、元からの地域の人だけでなく、他地域から西原に嫁いできたいわゆるよそ者も自分も、ここに嫁いだからには当然やるべきものとして引き受けた役割によって、自分が育てられたと感謝していることも多い。

それが地域の持つ、大きな教育力になっていたのだと思う。今は薄れてきているが、絶えず声かけを忘れず、子ども達にもあたたかなまなざしをかけてあげたい。

特に今活動の中心となっている60代から70代の方達は、貧しい時代に支えあって生きてきたご恩を、今できるときにお返ししているのだという。地域を想う、地域を愛する心がそこに表れている。地域も人も関わってこそ愛が育まれるのだと痛感する。